



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3162号 2016.8.2 発行

障害者差別相談センター、名古屋市が開設

読売新聞 2016年08月02日

開設された名古屋市障害者差別相談センター

名古屋市は1日、市障害者差別相談センター（052・856・8181）を開設した。神奈川県相模原市の知的障害者福祉施設で起きた殺傷事件で問題となった障害者差別に関する相談や調査、啓発活動や人材育成を行って差別の解消を目指す。



障害者差別解消法の施行（4月）を受けて、名古屋市北区に開設した。市社会福祉協議会が運営し、社会福祉士4人が業務にあたる。開所式で杉山勝・市健康福祉局長は「事件で亡くなられた方に心からご冥福を申し上げます。障害者差別に関する相談にワンストップで対応したい」と述べた。

障害者殺傷事件 救助の医師「やりきれない気持ち」 NHKニュース 2016年8月2日



神奈川県相模原市の知的障害者施設で入所者が刃物で刺され、19人が死亡、26人が重軽傷を負った事件から2日で1週間です。事件の直後、現場で救助活動に当たった医師がNHKの取材に応じ、「想像以上に厳しい現場で、なぜ多くの方が命の危険にさらされないといけないのか、やりきれない気持ちだった」と心境を語りました。

相模原市にある北里大学病院「救命救急・災害医療センター」の服部潤医師は事件の直後、「津久井やまゆり園」に駆けつけ、けがをした人たちの治療の優先順位を決めるトリアージや、病院への搬送の指示などを行いました。

現場の様子について、「大勢の人が刺され、まだ救出できていない人もいるという状況で、緊張感が伝わってくる想像以上に厳しい現場だった」と振り返りました。

服部医師は東日本大震災や熊本地震などの被災地で活動した経験がありますが、「今回は多くの人に首を刃物で切られた同じような傷があり、災害や事故の現場とは一線を画す印象を受けた。命に関わるようなけがをしていることを考えると、それだけ強い殺意があったのだろうと現場でも感じた」と述べました。

また、「被害を受けた多くの人に重い障害があつて、けがの状況などを聞き取るのが難しく、顔色や傷の様子、それに出血の具合を見て症状の重さを判断していった」と話しました。

そのうえで、「けがをした人を1人でも救うのがわれわれの使命で、その気持ちを強く持って診療や搬送に当たった」と振り返り、「なぜこんなに多くの方が命の危険にさらされないといけないのか、やりきれない気持ちだった」と、事件に対する憤りを語りました。

【相模原19人刺殺】植松聖容疑者、生活保護を受給 知人「数百万円を借金、遊興費に」

相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が刺殺された事件で、元職員の植松聖（さとし）容疑者（26）＝殺人などの容疑で送検＝が、同市から生活保護を受給していたことが1日、関係者への取材で分かった。借金があったとの情報もあり、神奈川県警津久井署捜査本部は経済的困窮が犯行の背景にあった可能性も視野に入れ、事件の全容解明を進める。

関係者によると、植松容疑者は2月に勤務していた同施設を退職して間もなく、同市に対して生活保護を申請。数カ月後に受給が始まったという。その後は、犯行時まで無職の状態が続いていた。

知人らによると、植松容疑者は犯行前、金に困っている様子だった。周囲に株式投資の方法を聞くなどして資産を増やそうとしていたという。

知人の一人は、「数百万円を借金して、遊興費に充てていた」とも話している。

植松容疑者は犯行時、職員から奪った鍵で居住区画を仕切る扉を解錠して移動しながら、入居者の実名を叫んでいたことも新たに判明。犠牲者には名前を呼ばれた入居者も含まれているといい、特定の人物を標的にした疑いがある。

事件は7月26日午前2時ごろ発生。施設の窓ガラスをハンマーで割って侵入した植松容疑者が約45分間にわたり、入居者の首や胸などを刃物で刺し、45人が死傷した。結束バンドで職員5人を縛ったが、刃物で傷つけることはなかった。

相模原の障害者施設殺傷 地域に半世紀、育んだ「共生」 やまゆり園「愛された施設なのに」

毎日新聞 2016年8月1日

19人が殺害される事件が起きた相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」は、開所から約50年かけ地域に必要とされる施設に育ってきた。貴重な雇用の場だったという事情もあるが、職員一人一人の努力で少しずつ信頼を積み重ねてきた。「みんなに愛された施設なのに」。事件から明日で1週間。山あいの町は悲しみに沈んだままだ。

園のある旧相模湖町は山がちで、首都圏の人が日帰りで訪れる観光地だが、地元住民が働く場は多くはなかったという。

園が開所したのは東京五輪が開かれた1964年。園の創立50周年記念誌「希望」によると職員の多くが地元で採用された。「やまゆり園のおかげで道路も良くなり、地元の人でも就職口がたくさん見つかった」と園を誘致した当時の町長の証言も記されている。元職員の女性（74）も「子育てを終えた女性やシングルマザーにとって貴重な働く場になっていた」と語る。

元職員（86）は「当時は風当たりが強く、園から募集をかけなければ職員が集まらない状態だった」。園で働く人たちは地域に溶け込もうと、雪が降れば率先して雪かきし、崖崩れがあれば避難所に毛布を貸し出した。毎年園の夏祭りは、今や住民も心待ちにする。

園は子どもたちに障害者と接する機会も提供した。地域と共に歩み、時間をかけて絆を育んできた園に平穏は戻るのか。ある職員は「ショックで出勤できない職員もいて、全然手が足りない」と不安を募らせる。【加古ななみ、遠藤大志、黒川晋史】

松永正訓の小児医療～常識のウソ 相模原の事件 障害児が生まれると不幸になる？

読売新聞 2016年8月1日

7月26日未明、神奈川県相模原市の知的障害者施設に男が侵入し、5本のナイフや包丁で19人も障害者を殺害するという事件が起きました。

被害者の数が戦後最悪であることに衝撃を感じますが、それ以上に恐ろしいのは犯人の

動機にあります。

「障害者は死んでくれた方がいい」

このような歪んだ考え方が大量殺人につながったのだと思います。事件が起きた直後、私は友人である作家の児玉真美さんから電子メールをもらいました。児玉さんには、海さんという成人した重複障害のお嬢さんがいます。海さんは施設に入所しており、週末になると自宅へ帰ってくるという生活をしています。児玉さんがお子さんを深く愛していることは言うまでもありません。

児玉さんのメールにはこう書いてありました。

「くやしい。本当に、くやしい。かなしい。やりきれない。そしてものすごく、おそろしい」

障害児（者）を持つご家族にとって、この事件は他人事ではありません。もしかしたら自分の子どもが殺されていたのかもしれないのです。痛ましいとか、許し難いとか、そういった感情よりも、「こわい」という気持ちが湧き上がってくるのです。

なぜこういう事件が起きてしまったのでしょうか？ そしてどうすれば同じような事件が防げるのでしょうか？ 政府与党の政治家さんからは、措置入院制度を見直すとか、障害者施設の警備を再考するとか、犯罪をほのめかす人にはGPSを埋め込むなどという発言が出ています。そういうことで解決できるのでしょうか？ 私はこの事件をきっかけに、私たち自身が障害児（者）とどう向き合っているのかも一度考え直してみる必要があると思います。

障害児が生まれた時の3つの神話

あなたにはとても親しくしている友人がいます。その友人の家族に新しく赤ちゃんが生まれたとします。その赤ちゃんがダウン症であると教えられた時、あなたは素直に「おめでとう！」と言えますか？ 一瞬、何と言っているのか困ってしまうのではないのでしょうか？ その理由は何でしょう？ それはあなたの心の中に、障害児が生まれるのはかわいそうという気持ちがあるからです。

生命倫理学に詳しい信州大学の玉井真理子先生は、障害児が生まれると3つの神話が発生すると言っています。その神話とは次の3つです。

- 1 障害児を育てるにはお金がかかる
- 2 きょうだいがイジメにあう
- 3 親亡きあとに行き場がなくなる

玉井先生はこの3つはすべてウソだと言っています。私もこれまでに、医者という仕事を離れて、20を超える障害児の家族に話を聞かせてもらった経験があります。その経験からも玉井先生の仰る通りだと思います。

日本の医療制度・福祉制度に様々な欠点があるのはその通りですが、意外に捨てたものではありません。障害児をケアしたり、医療機関にかかる時、多くの補助制度があります。お役所手続きがとても煩雑だという難点がありますが、金銭的には健常児を育てるよりもお金はぜんぜんかかりません。

イジメというのは、実に多くの原因が複合して起きるもので、きょうだいが障害児などという単純な理由でイジメは起きません。また両親の離婚が多いという説もありますが、これもウソです。現在の日本では2.9組に1組が離婚しています。今や離婚は決して珍しい現象ではありません。障害児を授かったから離婚率が増えるというのは、私の見聞きした経験ではあり得ません。

親亡き後の障害児のあり方を、親御さんはとても心配します。ですが、日本の福祉はそこまで貧弱ではありません。障害者支援施設への入所のほかにも、地域のグループホームで暮らすという選択肢もあります。お金の管理も成年後見制度を使って、障害者に不利益にならないようにすることも可能です。障害者が行き場所を失って路頭に迷ったなどという新聞報道など見たことはありませんよね？

これらの神話はすべてウソであり、私たちの目は偏見で曇っているのです。

すべては知ることから始まる

偏見の理由は無知にあります。無知には2種類あって、「中途半端に知っている例」と障害者を全然見たことがないという「完全な無知の例」があります。

「中途半端な無知の例」の代表は、医者と言えます。もちろん、医者のすべてに偏見があるわけではありませんが、医者の中には障害児を見放してしまう人がいます。

13トリソミー・18トリソミーと呼ばれる、生まれつき染色体が1本多い染色体異常の赤ちゃんが生まれることがあります。こうした子どもたちは、1歳まで生きることが難しく、成人になることは大変まれです。トリソミーの赤ちゃんは合併奇形を持っていることが多いのですが、一部の小児外科医や心臓外科医は手術を拒否します。私は13トリソミーの親の会に意見を聞かせてもらった経験があります。親御さんたちは、病名から短絡的に長生きできないと決めつけて、治療を行わない方針にしないでほしいと切望していました。また、医療経済の観点から、お金をかけて治療しても見返りがない（将来、納税する子になれない）などと言わないでほしいと訴えていました。

「完全な無知」というのは、私たちの大多数です。なぜ、無知なのでしょう？ それは分離教育のせいだと思います。私が育った昭和40年代の東京の下町の路地には、知的障害の子や高度難聴の子がいました。私たちはその子らを普通に仲間と考えて一緒に遊んでいました。決してそういった子たちを「劣った子」とは思わず、そういう個性なんだと幼い私は思っていたものです。

ところが1979年の養護学校（現在の特別支援学校）義務化以来、街から障害児の姿が消えました。もちろん特別支援学校には、支援学校にしかできない良い面がたくさんあります。しかし、普通学校に通えるはずの子が支援学校に行ってしまう（分離教育）と、私たちは障害児に対してどんどん無知になっていってしまいます。

私だって人のことは言えません。13トリソミーの赤ちゃんを1年半にわたって聞き書きして、私は『運命の子 トリソミー 短命という定めの子を授かった家族の物語』という本を書きました。この作業によってようやく自分の無知と偏見を乗り越えることができました。最近では、自宅で人工呼吸器につながって12年間「寝たきり」のお子さんを1年3か月、聞き書きしました。ともすれば、悲惨としか感じられない「呼吸器の子」の周囲には実に豊かな世界が広がっていることを知りました。「13トリソミーの赤ちゃん」も「呼吸器の子」もまったく不幸ではなかった。なぜでしょうか？ それはこの子らのご家族が孤立しておらず、社会と共生していたからです。

いろいろな人がいる。そしてそれを受け止めて、包み込む社会がある。だから私たちは安心して暮らせる。弱い者に「劣る」という烙印を押して、疎外する社会に未来はありません。

この事件が私たちに問うものは何か？

相模原の事件報道に接して、私たちの全員が「許せない」「常軌を逸している」と思ったことでしょうか。しかし、「許せない」という心の奥底に「殺すことはあってはならないが、重度の知的障害者は生きていてどうなの？」という疑問の欠片はないのでしょうか？

政治家が、重度障害者の人格を否定するようなことを言ったり、超高齢者の生き方に疑問を差し挟んだりしても、私たちは眉をひそめるだけで、その政治家が選挙で落選したり内閣支持率が落ちたりはしません。つまり私たちはどこかで、そういった発言に対して「一理ある」と思っていないかと考え直す必要があります。

昨年、茨城県の教育委員が「障害のある子の出生を防げるなら防いだ方がいい」と発言し、激しい非難を浴びました。では、染色体の出生前診断はなぜ許されるのでしょうか？ いわゆる「新型出生前診断」は3年が経過し、検査を受ける人はしだいに増えています。私はこの検査のすべてを否定するつもりはありませんが、この検査によってダウン症などの染色体異常児に対する偏見が助長されたと感じています。私たちはこうした検査に対して果たして倫理的に正しいのかと疑問を抱きつつ、いざ自分の問題になると障害児を授かりたくないと考え生命の芽を断ちきってしまうという現実があると言わざるを得ません。

私たちの誰もが、心の深い部分に障害者に対して差別する心を抱えていないでしょうか？ この事件は、広く薄く社会に潜んでいる差別の心理が、この犯人の歪んだ心を通じて増幅し形となって表れてしまったものだと私には思えます。

今回の事件で私が最も心配するのは、日本中の小学生以下の幼い子どもたちです。この子たちは事件の意味を深く理解していないと思います。幼い感情の中に、「生きる価値のない障害者が殺された」というフレーズだけが残ると、新しい差別の芽が生まれてしまうのではと心配です。各ご家庭でこの事件について話し合ってみてください。親は幼いお子さんに、「あらゆる命は唯一無二で、生きる価値のない命はない」と教育してください。そして私たちは自分の胸に手を置いて、自分は何かに対する差別者ではないかと問いかけてください。それがこの事件と同時代に生きた私たちの責任です。

相模原・殺傷1週間 県手をつなぐ育成会の福永理事長に聞く

徳島新聞 2016年8月2日

「障害者や家族を全力で守る」と語る県手をつなぐ育成会の福永理事長＝徳島市南矢三町2の県障がい者交流プラザ

相模原市の知的障害者施設で19人が刺殺された事件は、2日で発生から1週間になる。弱者やマイノリティーに不寛容になりつつあるとされる現代社会。知的障害がある人の親でつくる社会福祉法人「徳島県手をつなぐ育成会」の福永岩一理事長（78）は1日、「障害がある全ての人は宝物。全力で守りたい」と思いを語った。



「許し難いという思いを持ち続けている。障害のある子を持つ全ての親が同じ気持ちではないか」。福永さんは重度の知的障害がある長女（47）の親として、障害者の命が軽んじられる社会に警鐘を鳴らす。

事件後、育成会が運営する障害者支援施設の入所者たちは、ニュースを知って明らかに動揺していた。「あなたたちの命は守るから心配いらぬ」と言って落ち着かせたが、事件の影響の大きさを思い知らされたという。

元施設職員の容疑者が「障害者なんていなくなってしまえ」と供述していることには、「言葉がない」と口をつぐんだ。同時に、障害者への理解が浸透していない状況を嘆く。「今回ほどではなくても、障害者への偏見はなくなっていない。施設が山際に多いのはそういうことだろう」

親として反省すべき点もある。障害者福祉が充実する半面、育成会の活動に参加する若い親が少なくなっている。「子どもに障害があることを隠そうという風潮は依然根強い。親が団結して声を上げていかなければ、社会は変わらない」と語気を強めた。

政府が施設の安全確保を検討する方針を示しているが、「警備を強化して閉鎖的になれば、地域との交流が途絶えてしまう」と懸念する。地域住民との交流は障害者にとって何よりの楽しみ。「どうすればいいか、親の会としても積極的に関わっていきたい」

育成会は、互いに人格と個性を尊重する社会づくりを求める要請文を県や市町村に送った。「障害者のために何ができるのかが問われている。障害者と接点のない人と本当に共生する社会に変えるため、力を尽くしたい」と話した。

脳性まひの娘を見守る母の願い 「誰もが大切にされる社会に」

東京新聞 2016年8月2日

相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で七月二十六日に十九人が刺殺され、二十六人が負傷した事件から二日で一週間。障害者差別があらわとなった事件は障害のある人々や支える家族に重い影を落とす。「一人ひとりが大切にされる社会に」。その願いは切

実だ。

娘は言葉で自分の気持ちを伝えることはできないが、好きな音楽に顔をほころばせ、口内炎ができて不機嫌になる。「健常者に比べて変化が見えにくいだけ」。母の岩城節子さんは、重い脳性まひがあるわが子の様子をこう表現する。

相模原殺傷事件で逮捕された植松聖（さとし）容疑者（26）＝殺人容疑などで送検＝は「障害者は不幸」とひとくくりにしようとした。そうではないことを、親の自分たちが誰よりも分かっている。

娘の明子さん（左）とフラフープで遊ぶ岩城節子さん＝7月31日、東京都世田谷区で

七月三十一日昼、東京都世田谷区の岩城さんの自宅。CDプレーヤーから流れていたお気に入りの男性歌手の歌が終わると、車椅子に身を預ける娘の明子さん（37）が「あー、あー」と小さな声を上げた。「こうやって教えてくれるんですよ」。節子さんが再生ボタンを押す。



クラシックから童謡、朗読。好きなものがかかると、明子さんの表情はぱっと明るくなる。

一番好きなのは宮沢賢治の詩「雨ニモマケズ」の朗読だ。両手足が不自由で、目は周囲が明るい暗いかの区別ができるだけ。重い知的障害もあるが、耳はしっかり聞こえている。

「意外に力も強い。これ、私の運動のために買ったんですが」。節子さんがフラフープを手に取り、明子さんに一方を握らせ、その反対側をつかんで力を込めると、明子さんは力強く引っ張り返した。目に光が差す。

「娘が笑顔になると、こちらもうれしい。いくつになっても、本当にいとおしくてかわいい」

明子さんは仮死状態で生まれ、現在まで常時の介助が欠かせない。夫は足腰が悪いため、主に節子さんが担当する。七十代の節子さんにとって、体重約三〇キロの明子さんを車椅子から抱え上げ、和室の介助用ベッドに移すなどの負担は大きい。体力が続く限り、自宅で共に暮らすつもりだ。

明子さんは言葉が話せないので、毎日一緒に過ごす親でも、なかなか分からないことはある。最近も機嫌が悪い日が続く、どうしたのかと思っていたら、しばらくしてようやく口内炎ができていたことが分かり、胸をなで下ろした。

施設で障害者を介助する職員らには、何げないサインにできるだけ気付いてほしいと思う。それが、障害者一人一人をかけがえのない存在として見ることに繋がると思うからだ。

「植松容疑者は施設で働きながら、一人一人の変化に気付かず、障害者を下に見る意識を強めてしまったのだろうか」

節子さんは残念そうに話した。

相模原殺傷1週間 道内施設「地域と距離」懸念

北海道新聞 2016年8月2日



防犯カメラの映像を確認する職員。防犯体制強化のため、設置台数をさらに増やす予定だ＝1日午後、札幌市中央区の札幌光の森学園（小室泰規撮影）

相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が刺殺され、26人が負傷した事件は2日で発生から1週間。道内の障害者施設では、防犯カメラの増設や施錠時間の延長など安全対策を見直す動きが出ている。一方で、「このまま防犯対策が強まれば、地域住民との共生から遠

ざかりかねない」と施設の関係者は困惑している。

「利用者の安全を確保しなければ」

札幌市中央区の知的障害者や精神障害者らの入所施設「札幌光の森学園」の田中厚子施設長（62）は事件を受け、さらに思いを強めた。同施設では、既に防犯カメラを施設内に13台、屋外に1台設置しているが、今月中にも台数を増やす方針だ。

千歳市の「障がい者支援施設いずみ」では事件後、防犯対策について検討する委員会を立ち上げた。夜間のトラブル発生を想定した連携体制の強化など話し合う予定で、荒洋一総合施設長（60）は「効率的な防犯について考えたい」。

これまで午後9時だった玄関の施錠を事件後、2時間早めた施設もある。

障害者を取り巻く環境はこの10年近くで大きく変わった。地域への開放が進み、入所者は町内会の運動会や盆踊りに積極的に参加。街の中で障害者が生活するグループホームも増えた。2012年には「障害者虐待防止法」が、今年4月には「障害者差別解消法」がそれぞれ施行され、障害の有無に関係なく共生に向けた流れを後押しする。

相模原殺傷1週間 府内自治体 試行錯誤

大阪日日新聞 2016年8月2日

相模原市の障害者施設殺傷事件が発生から1週間経過し、大阪でも再発防止に向けた試行錯誤が始まっている。自治体が施設の防犯対策の改善に乗り出す一方、重複障害者からは「障害者へのマイナスイメージを解消していかないと抜本的な解決にはならない」との声が上がっている。

大阪府は、事件翌日から府所管の入所施設のうち計16施設を対象に安全管理体制を電話で聞き取った。府によると、緊急時のマニュアルは作っているものの、侵入者を想定していないケースが多かったという。

障害者支援施設のスタッフと談笑する障害者たち=1日午後、大阪市天王寺区の区民センター



聞き取りでは、過去に不審者が侵入した事案はなかったが、一部の施設は今回の事件を受けて防犯訓練の実施を検討。「地域とのつながりは大事だがセキュリティーを見直す必要がある」との声も上がったという。

府は、防犯体制の参考になるモデルケースの情報を収集中だ。

大阪市は、市内の障害者施設31カ所、高齢者施設326カ所に、注意喚起と安全管理体制についての聞き取りを行った。不備があれば指導する。

吉村洋文市長は7月の定例会見で「障害のある方を狙い、尊厳を否定した許しがたい犯行。府とも連携し、防犯対策を強化していきたい」と述べた。

■普通に暮らせる

障害者支援事業を手掛けるNPO法人ちゅうぶ（大阪市）では、利用者とスタッフが事件の起こった要因などを考える場を設けた。それぞれが考えを整理。交流サイト「フェイスブック」などで発信する利用者もいる。

「こういう事件が起きたのは不思議ではない」と分析するのは、脳性まひで24時間介護が必要な高田裕子さん（46）。「(重複障害者が生きていくのは不幸といった)容疑者の考え方はすごく片寄っているが、一般的な人も障害者にマイナスイメージを持っている人は多い」と説く。

石田義典事務局長は、「障害者」を理由に犠牲者の氏名が非公表になった点を端的な例として挙げる。イメージの変革に向け「どんな障害でも必要なサービスがあれば街中で普通に暮らせるという事実を社会で共有すべきだ」と強調する。

グループホームで暮らす脳性まひの福永一洋さん（27）はコンサートを楽しみ、楽曲作りにも挑戦。「普通にみんなと一緒に暮らしたいのを分かって」と力を込め、同様に脳性

まひの森園宙さん（27）は「1人暮らしをして私も家族も自分の時間を大切にしている」と明かす。

■仕組みの問題も

介護職の職場環境や、措置入院後のフォロー体制といった問題にも注目が集まる。

大阪市の「障害者の自立と完全参加をめざす大阪連絡会議」の古田朋也議長は、今回の事件に限らない問題として、介護の現場で個々の職員が孤立しない職場環境づくりの重要性を提示。措置入院した人が退院後も医療や福祉のフォローが得られる体制も重視し、「事件の詳細が解明される中で、自分たちに何ができ、行政に何ができるか考えていきたい」と、捜査の進展を見守っている。

論説：【相模原殺傷1週間】共生社会どう実現

福島民報 2016年8月2日

日本中を震撼[しんかん]させた相模原市の障害者施設殺傷事件から1週間が経過した。現場には今も花を手向ける人が絶えない。26歳の容疑者の男は「障害者なんていなくなればいい」と供述しているとされる。ナチス・ドイツの優生思想を連想させる大量殺人であり、絶対に許されない。このような考えが生まれる素地が日本社会にあるということだろうか。

優生思想は生まれてきてほしい人間の生命と、そうでないものとを区別し、生まれてほしくない人間の生命は人工的に生まれないようにしても構わないとする考え方だ。ナチス政権下、ドイツでは20万人にも及ぶ障害者が安楽死させられたという。

日本でも「優生上の見地から不良な子孫の出生を防止し、母体の健康を保護する」ことを目的とした優生保護法が平成8年まで続いた。障害者らに不妊手術が行われた。

今年4月、障害者差別をなくすことを目指す新しい法律「障害者差別解消法」が施行された。「車いす利用者であることを理由に入場を断る」「学校の受験や入学を拒否する」などといった対応は「不当な差別的取り扱い」とされ、役所や国公立学校などの公的機関、民間事業者とも禁じられている。

民間企業などは努力義務だが、非対応や違反が慢性的な場合は行政指導や罰金が科せられる可能性がある。法が軌道に乗りつつあった時期に信じ難い犯行が起きた。

「不寛容社会」という言葉を最近よく聞く。イスラム教徒や移民、有色人種などに対する差別が世界にまん延する。日本もご多分に漏れず、ヘイトスピーチ（憎悪表現）に代表される少数派に対する強い偏見と排他的な風潮を強く感じる。多様性を認めない狭量な社会には、成長も進化も望めないのではないか。

知的障害者と家族でつくる「全国手をつなぐ育成会連合会」は相模原の事件後、緊急声明を出した。「事件で無残にも奪われた一つひとつの命は、かけがえのない存在でした。（中略）お互いに人格と個性を尊重しながら共生する社会に向けて共に歩んでいただきますように」と訴える。

全容解明には時間を要するが、事件は障害者へのヘイトクライム（差別・憎悪の犯罪）との見方が強い。身近な場所にヘイトクライムの芽が潜んでいないだろうか。言うまでもなく誰もが生きる権利を平等に持っている。障害の有無に関係なく、共生できる社会をどう実現していくか。私たちは重い課題を突き付けられている。（浦山文夫）

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

